

土 淨

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授承認雜誌）第三五号
昭和五十年十月二十五日印刷 昭和五十年十一月一日発行

第四十一卷

第十一号

1975

11

拜み合ふ 十夜挨拶衆 牛歌 (牛歌)

拜み合ふことが
 挨拶十夜衆

一田 善寿

(牛歌)

(浄土宗福岡教区教区長
 浄土宗教誨師会理事長)

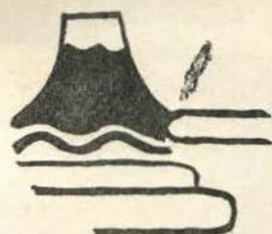
死刑囚の教誨を続けていますが、今月は教誨堂が十夜会座となっています。浄土宗の五人の教誨師が十夜僧となり、死刑囚が日課珠数をかけ十夜の善男子となっています。

みんなで木魚をたたき、大きな声でお念仏を称えた後で、人をあやめた手を合せて仏顔となり、拜み合うことが挨拶となります。

掌(て)を握りしめますと拳骨となり、闘争の相(すがた)となります、握った掌を開いて合せますと、蓮の蕾となり、平和の相となります。

死刑囚ばかりが極重悪人ではありません。お互も罪の掌を合せ、一家中が朝々拜み合うことを挨拶とし、俵になりましょう。

十一月号



目

次

拝み合ふことが挨拶十夜衆……………	田 善 寿
阿修羅と死と仏縁と……………	村 上 真 完…(2)
沖縄開教の祖袋中上人……………	嵐 瑞 激…(6)

——袋中寺の再建落慶を祝して——

現代のモラルを考える⑨「争い」

嫁と姑の問題……………	岩 井 信 道…(10)
	齊 藤 昭 俊…(13)
善悪の相克……………	成 田 俊 治…(16)

ご法語にいただく 法然上人の人と生活⑪

女性たちへの態度……………	宝 田 正 道…(19)
ハワイに生きる(中) 一日系人社会史……………	新 保 義 道…(26)
書の四季⑧ 円応国師寂室元光……………	林 錦 洞…(30)
釈経歌集「続々法の衣」に就いて⑤……………	石 畠 俊 徳…(33)
念仏ひじり三国志⑨法然上人をめぐる人々……………	寺 内 大 吉…(38)

表紙 久住静雄画

カッパ 大正大学美術部



阿^あ修^{しゅ}羅^らと死と仏縁と

村上真完

(東北大学助教授)

七月二三日 午後、夏の日ざしが降りそそいでいた。昼食後、私はちょっと庭に下りて、池の金魚に餌を与えたりして、まもなく家に入ろうとして玄関に来ると、三歳になった三女のくが、外に出ようとして、玄関のところに出てきていて、赤いサンダルを履こうとしていた。そのとき、ふと意外な気がして、くが外に出ては、あぶないのではないか、という一抹の不安のようなものがあつたが、また、大丈夫だろう、というような気もして、まためんどくさいような気もして、そのとき台所か居間にいたらしい妻に声をかけようかと思つたが、黙つて玄関から入り、すぐに階段をのぼつて、二階の書斎にゆき、机の前に坐つた。何だか外の方が気になり、窓から外を見たい気持もおこつたが、気を散らしてもな

らないとおもひ、『マハーバーラタ』の一節の和訳のノートを作りはじめ、何行か書き進んでいった。そのとき、突然階下から、妻のただならぬ声がした。くが池に落ちていたのだ。

こんなことで、私どもは子を失つた。親の落度によって子が死んだ。母親として妻には大きな打撃であつたようだが、これは私にもこたえた。まんじりともできないまま、その夜は過去からの自分をかえりみることもなつていた。

二十五年前 高校一年の夏休みであつた。父にしたがつて私は建築材を運んでいた。数十本ずつ立てかけてあつた角材

の中から五寸角を選び出して、門の軒下に運ぶのであった。そのとき最後に私が一本の角材を肩にかつきかけ、がむしゃらに引くべると、残りの角材が倒れかけたので、あわてて数歩前に進んだところ、立てていた角材がみな倒れて、私が手にしていた角材の先が、父の頭にあたった。これがために、父は意識不明におちいり、五日後に息をひきとった。意識不明になる直前に、父は私に「お前にあたらないでよかつた。危なかつたなあ」と言ったのをおぼえている。これが父のさいごのことばだったようだ。私の乱暴な、がむしゃらな行為によって父は死んだ、という思いは、いつまでも残っている。

いま、子をなくした。小さい子供が危ない、といわれていたのに、池を造ったのが、わるかつた。この春に二階を増築して、やっと一月前から二階で仕事をするようになったのだが、これもいけなかつた。いままですり階下に書斎があれば、もっと注意がゆきとどいたはず。この屋敷を選んだときに、敷地のすみに湧水のあるのを見て、池を作るのによいと思つたものだが、これもわるかつた。だが、本当は、こんなことをも含めて、何でも思つたことを、がむしゃらにやって

来た、私の性分や生き方に、問題があつた、と気づいた。

物心ついて以来、競争の世界において、意識的、無意識的に、生きることを戦いとしてきたことに気づいた。特定の敵があるわけではなく、むしろ大てい自分との戦いであるにしても、自分の思うことを通そうとする。また上を望み、向上をめざす。そのために、努力も要し、緊張と多忙の状態が続き、いつも心が休まらない。それが戦いのすがただ。そして、いま、もっともはげしい戦いにあたっている。例えば自転車は速く走らないと倒れる。立ちどまり、停滞することは、仕事の廃業、生活の放棄にもなりかねない。あるいは流れる川をさかのぼって進むようなものにも思える。かなり進んだと思つても、休むやいなや、どんだん下に流されてしまう。流されてはならじと、上ろう上ろうとする。そういう状況に自分の生活、仕事がある。そこに生きがいもあるにしても、こういう生き方を選び、まもっているところに、自分の性分があるのだ。こういう性分が事故をも起こすことになったのだ。

このように、私にとって生きることは戦いであつた。そして戦いを辞さなかつた。戦いを事とするのは阿修羅あしゅらだとい

う。この阿修羅の性分が、私なのであつて、この私の阿修羅の性分が、父を死なせ、子を死なせることになったのだ、と思つた。

だが、この性分はなおるだろうか。戦いでない生き方が出来るだろうか。悲しいことだが、生きていくかぎり、それはむりなようだ。

むかしほど幼い子供が病気で死ぬことが多く、弱い子供は生きてゆけなかつたようだ。大てい昔の親は子供の死に会つてゐる。私の親にしてもそうだ。私の恩師の金倉円照先生にしても、その先生の宇井伯寿先生にしても、子供を亡くした親の思いを、著書のはしがきに、控目にもらしてゐた。和辻哲郎博士にしても子供をなくされてから、仏教研究を始めた、とかいわれてゐる。

さいきんは、子供が病気で死ぬことが少くなつたといつても、交通災害をはじめ、子供の事故が少なくない。私どもはそういう悲しみに会わなかつた。これは幸いなことだとよく思つてゐた。

だが、そういうことは他人事ではなかつたのだ。そして、いまや子の死をどう受けとめるか、私どもの問題となつてゐた。

子供のころを思いおこしてみると、仏さまが身近かにおられた。きつと父や祖母の読経と念仏の声を聞いて育つたようにおもえる。何事も知らないまま、仏さまは朝夕拝むものだと思つてゐた。とはいへ皆で仏さまの前に坐つてゐた、鮮明な記憶は、妹が生まれて一月足らずして死んだときである。暗い夕方に、父は長いお経を唱え、私たちは坐つてゐた。

こういうのが、私にとって仏縁であつた、といつてよからう。そしてこの仏縁をどう受けとめるべきか、物心ついてからの、重い問題でもあつた。しかしいつかは、小さいときからの仏縁というものを、有りがたいものだと思うようになってゐた。

とはいへ、寺をはなれ、仏さまのもとをはなれて、寮に住み、長屋に住み、アパートに住み、団地に住むようになって、仏さまに遠くなつた。これを時々心におもうこともあるが、大ていはそのことさえも忘れて、すさんだ、戦をこととする生き方をしてきたものだ。

いま私は改めて仏縁を知ることになつた。泣いても悲しんでも死んだ子は生きかえらない。やがて納棺し茶毘に付しつ

つ、くには極楽に行ってもらうのでなければ困ると思つた。そしてただ極楽に、阿弥陀仏の国に、くにがゆくようにと願っていたようだ。

極楽のことを説く『阿弥陀経』には、これが難信の法だといっている。信ずることのむづかしさを教えている。今や地上に未知の土地なく、月世界にもゆける時代に、極楽はどこにあるのだろうか。何とかしばらく未知の数千億光年の宇宙のあなたに求められるのだろうか。そうではあるまい。

『観無量寿経』には

「阿弥陀仏はここを去ること遠からず、汝まきにおもいをかけて、あきらかに、かの国を観ずべし」

といい、極楽世界と阿弥陀仏を心に観ずることを説いている。この辺に、さきの問に対する解答があるようだ。とはいへ、極楽を心にえがくことは、そうできることではない。

『観無量寿経』にもとづいて極楽をえがいたのが、当麻曼茶羅だといわれる。さいきん、その写真複製を借りて見る機会をえ、古代人の構想力の大きさに驚嘆し、その世界にひかれた。弥陀三尊を中央にして、池あり蓮花あり、樓閣あり橋あり、樹あり茂みあり花あり、雲あり、その中にいたるとこ

ろに仏、菩薩のつどいが見える。すばらしい大きなたのしい公園だ。なくなつたくに見せたい。そこで、くにと遊びたい、とおもう。

いや、そうではなくて、くにはもう、その仏の国にいて、私どもを見ているのではないかもおもえたりもする。

もはや、くには、私どもの子供ではない。仏の世界にいる。そして私どもには仏縁が授かったのだ。ほとけさまが授かったのだ。朝夕、みんな、お経を読み念仏をとなえて拝む。くにに仏を見る思いがする。いつも、くにの写真に向つて、みんな、

南無阿弥陀仏

といって、おがむ。くには仏だ。仏の世界から、微笑んで私どもを見ている。そういう気がする。

仏縁が授かった、ほとけさまが授かった、ということとは、日々戦いを事としている阿修羅の世界を生き延びる中で、たとい一瞬でも、仏の世界にたちかえること、阿修羅の性分を一瞬でもよいから、離れる、ということだろう。それはそれで、私どもにとって、大事なことなのだ、とおもうようになる。

(昭和五十年九月三十日記)



沖繩開教の祖袋中上人

— 袋中寺の再建落慶を祝して —

嵐 瑞 澂

(兵庫縣篠山町來迎寺住職)

今度、浄土宗沖繩別院袋中寺の再建と社会福祉袋中園が、一宗をあげての事業として、本土現地一丸となって遂行され、袋中寺の落慶法要が十月三十日に厳修されましたことは、先のだん王別院袋中寺創設に関係したものと、真に有難いことであり、落慶を祝して小文を記すことにした。

先の袋中寺は昭和十二年に、袋中上人三百年遠諱追恩のため、檀王法林寺の信ヶ原良哉師の心願によって建立され、同年四月廿七日入仏慶讃法会と大講演会が実施された。この時は大阪毎日新聞社が後援し、信ヶ原良哉師をはじめ、時の教学部長江藤漱英師、岸信宏（現門主）袋中庵主賀幡靈定尼等尼僧六名と拙僧が随喜し、参拝団

は七十余名で、この日は県知事、市長等県内名士が多数列席されて非常な賑いであった。又別に袋中上人顕彰展覽会や、記念伝道を各要地で実施し、何れも未曾有の盛大さであった。

ところで、沖繩の念仏教化の祖袋中上人を顕彰しようとする動きはそれより先、地元沖繩の仏教連合会、史蹟保存会の人々によって、大正十三年十月、那覇市松下町に浄土宗管長山下現有門主の揮毫になる「袋中上人行化碑」が建設されたのにはじまる。

戦国の世、天文二十一年（一五五二）、福島県岩城郡の豪族賀茂道祐の次男として誕生された袋中上人は、その後京都府飯岡西方寺にて西化されるまでの八十八ヶ年

の生涯は、不倦精進の学解と教化に終始された。解行高き兄以八上人（厳島光明寺開山）と異って豪放、謙虚、好学の三つを兼ね備えた偉僧であった。生まれつき俊敏で虚空藏菩薩の化身と称せられ、叔父存洞師も史記の平原君の語により「賢士の世に処する、錐の囊中にあるが如くその末必ず現わる」の意の袋中の名を付した程であった。上人は矢ノ目如来寺、山崎の専称寺、大沢の円通寺の名越派の諸檀林や増上寺に入りて学解に精進され、

玄冬達上人撰 独舟中山阿耨戒
尊日人高山方倒景 潜跡探人自岬枝
一眠快活是千日 逆老眼可莫辞百五
琉球神道記卷第五終

此二冊有草案自南堂臥病平手至中國名刹陽春行記
之正格之路中無中而主く高山大念手終之使も草中良之
慶安十三年 十二月初八日

袋中自筆「琉球神道記」卷末・重文（袋中庵蔵）

更に足利学校にて校主九華和尚に禅学、更に会津の円性に台密、福島の月空に禅学、会津の釣雪斎に周易、曆、天文地理、兵法、医術を習得するなど、廿九才旧里橘葉成徳寺第十三代を継ぐまで、奥羽関東近畿各地を遍歴して、求法に努力された。殊に円頓戒を台嶺の法泉僧正より坂本の来迎寺にて登壇重受するため、熊野、高野山を巡って大成を重受されたことは求法の熱烈さ、真剣であったことを示すものである。

かく内外典に通曉して博覧強記の青年の上人は、真言や禅宗の僧と悉曇、梵文の論諍、対禅批判の著作六部を著して対外活動を活発に行った。しかし三十九才の天正十八年に恵心僧都の往生要集を披き、空観の下に法眼頓に開き、阿弥陀仏の中に真実の自己を見て、回心、三昧発得して念仏三昧の行者となった。

その後日課六万遍、六時の勤行怠ることなく行軌一層厳格に、不倦精進の教化活動を展開された。

上人の業績は名越派教団の関西進出、名越派伝書の整備、五重伝法の確立、古写古刊本の經典を蒐集して一切經を南都念仏寺に経藏を創建して保存し、内外典にわたる半百部百余卷の著作、その多くが達意的批判的で卓見の所説が多く、神道、本地もの、曼荼羅の図像部に及ぶ

幅広いものであり、上人の蒐集されたもの、著作の中には現在国宝や重要文化財の指定をうけていて、学的に貴重なものが多い。

上人の教化伝道は東北・近畿を中心に南方沖繩に及び、帰依した人々も徳川家康の異母弟松平定勝の子定綱や酒井雅楽頭忠清夫妻、琉球国王尚寧王をはじめ諸大名、僧侶、在俗庶民層など広汎であった。それ故新寺の建立、廃寺の復興二十余ヶ寺、門弟の教養多数に及んだ。

特に慶長七年、上人五十一才の時入明の宿志を果さんとして九州地方に渡り便船を求められた。当時西海の交通貿易事情は江戸幕府が開創せんとする時点であり、長期にわたる戦国の世、豊臣秀吉の対外政策によって公的交渉が開かれず、海賊か私的貿易に過ぎなかった。しかし諸外国、特に琉球国より九州各大名の港に来て密貿易するものも多く活気を呈していた。当時の港に博多・坊津・山川・平戸・府内・飢肥・外浦等があり、特に薩摩と琉球とは密接な関係にあった。

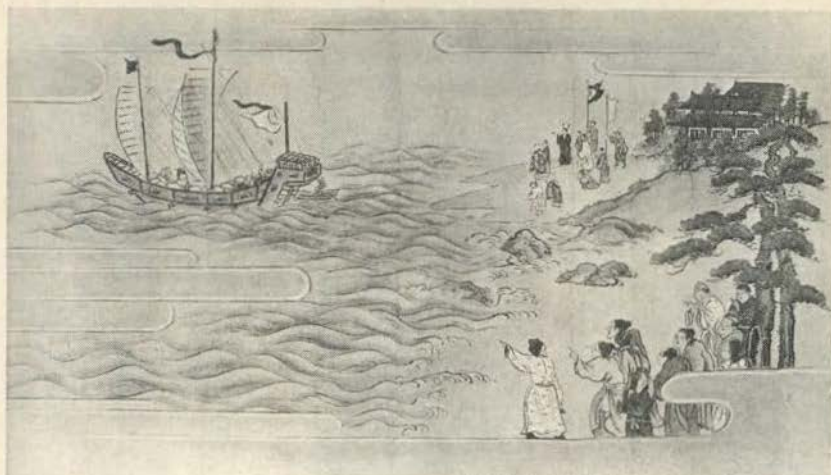
上人はかかる事情から大隅、薩摩の国に入りて便船を求められたが失敗され、ついに法友で平戸の法音寺の源管長老(誓願寺浄土寺開く寛永六年寂)の許に留錫して乗船の機会を待った。



昭和十二年の袋中寺入仏慶讃法要の模様

海賊船まがいの船に船印二本を建て水と食料を積み、仏像仏具と研究ノート枕中書五冊を携帯して出港され明国に着岸せんとしたが、彼明人畏怖して入れず、止むなく遠く呂宋南蜜を廻って琉球に入港された。

当時入明を志した僧に頼尾の俊正房明忍があり慶長十二年七月出港して入明を企てられたが、やはり失敗して対馬に滞在された。



伝詞絵上人一上人袋中去る縄沖

上人は慶長八年沖縄に到り、同十一年同国を去るまで三ヶ年余かの地にあって念仏を弘通された。このことは琉球の史書、琉球三代記、琉球国内記、中山世譜、球陽に記載されて、教化の甚大なりしことを知ることができる。

この上人の沖縄教化布教は浄土宗門伝道史上の不滅の功業であり、上人以前に彼の地に念仏を伝えたるものなく、その以後と雖も伝道したものがない。

琉球国第二十四代の尚寧国王は深く上人の学徳に帰依して、桂林寺を那覇市久茂地町に創建して四事の供養をなし、上人帰朝に際しては青貝掛板、書棚など三十六品に及ぶ土産品として文化財を贈り、それが現在檀王法林寺宝蔵に収蔵されている。

この外貴族（大名方）士族、平民の各階層からも多くの信者がいた。特に士族で最高の位階を持っていた役人の馬高明の為に琉球神道記、琉球往来を著作し、儀間真常のような實生産業（唐竿・砂糖・織物）に功勞のあった篤信家が出た。

現在垣花、小禄、具志の三浄土役、アンニヤ村の京太郎の人形芝居に見られる念仏信仰はゆがめられた姿であっても、球陽に記す如く上人が經典の佳句に基いて、和俗言をもって人々を教化した遺徳を偲ぶことができる。

今度の再建の好機を逸せず、上人の偉業を継ぎ、過去にそうであったように沖縄人の袋中寺として活発な活動を切望するものである。



争い

現代のモラルを考える

第九回



嫁と姑の問題

岩井 信道

(浄土宗布教師会近畿支部長
京都市伏見区阿弥陀寺住職)

少し話題は古いが、まだまだ日本の社会にはこの問題で悩んでいる人が多い。女性だけのことはなく、これにまきこまれる男性諸君は、本当になさけない思いをさせられるのであります。どのようにすれば幸せな家庭がきつて、老人も

若い人達も楽しく暮すことができるのでしょうか。ここに実例を御紹介して、その方法を考えてみたいと思います。

ある女子短大で、卒業も近くなった学生に

「皆さんはどの様な結婚を望みますか」

と聞いてみるとその答が

- 1 両親と別居であること
- 2 月収十五万円以上のこと
- 3 自動車があること

これ等の答が一番多くあったそうです。愛情なんかどちらでも良いので、かなりの生活を安定しておくことができる、これが第一であります。その中で両親と別居のこと、これは実際には双方とも気楽で良いのにはちがいありませんが、そうもできない場合もありますし、愛情こめて一生懸命に育てて来た両親には全く不本意な言葉であります。

★

同じ位の年頃の兄と妹を持った家庭が二軒ありました。都合よく妹娘を交換して二組の新婚さんができました。つまり娘を嫁にやった先から息子の嫁を貰ったわけです。大変都合の良い話でしたが、片方の家で、お母さんとお嫁さんの仲がわるくなりました。頑固なお母さんがどうしても嫁を離縁するといふのです。お父さんや息子がなだめまして、

「もしこの嫁を離縁等すると、先方へ縁づいている家の娘も不幸になるよ」と申しますと

「いいえ私の娘にかぎって悪いことはありません。帰される理由はありません」

といひます。どこかに自分勝手な考え方があつたようです。

★

ある人が年頃になつた息子の嫁をさがしてほしいと言つて頼んでまいりました。

★

「お宅には娘さんがありましたね、あの方はどうなのですか」

「ハイ 娘の方もよろしく願ひします」

そこでお嫁さんはどのような人がよろしいかとききますと、やはり若い娘を貰いたい、そしてせいぜい自分の家風に合うように教えたいと申します。娘さんはどのような所へと聞き

ますと、娘はやはり二人キリの気楽な所へやりたい、と平気でいひました。貰う嫁はみっちり私が教育する、娘は親のいない所へ。何とも理屈に合わないことをこのお母さん気がついていふのでしようか。

★

★

お嫁さんが二人目の子供を産むので自分の里へしばらく帰ることになりました。上の子を主人のお母さんに頼んで行くのですが、自分が平常使用している押入の一角が充分片づけることができなかったので、

「お母さん、すみませんけどここだけはあけないようにして下さいね」

と何気なく言い残して出かけました。

お母さんは、ははーうちの嫁には何か私に知られたくないものがあるのかしらと思ひました。せまいアパートの中で一つのものでもさがそうと思ひますと、あけてはならないと言われた押入の一角が、お母さんに取ってはどんなに不便な、不愉快なものであつたでしょう。お嫁さんが言つた一ことに「汚れものが入つてははずかしいから」とでもつけ加えられていたら本当に何でもなかつたのです。お母さんは微笑ながら、お嫁さんの下着でもお洗濯でもしてあげていたことでしょう。お互い一言の言葉づかいにも気をつけると共に、相

手の言ったことを曲げて受取るのではないようにしたいものです。

★

お母さんが遠方へ嫁がせてある娘の所へ久し振りで出かけました。生みの娘の所ですから気兼ねがございません。つい十日程と思っておりましたのが一ヶ月にもなりました。

お嫁さんは、こんなに永くいらしては着物にもおこまりだらうし、お小使いも少なくなつただろうと思ひまして、手紙と共にそれ等のものを送つてまいりました。「お体さえ御元気でしたらごゆっくりして来て下さい、お小使いを送ります」という親切な手紙であります。他人から見ればよく氣のつくお嫁さんだと思われませんが、お母さんはそうは思ひませんでした。

「もう帰ろうと思つていた時に、この様なものを送られては、帰ることができません。これは嫁が少しでも長く私をこちらにおこうと思うからですよ。私がいなければ、氣楽ですからね」

どうも困つた受取り方です。もう少し素直に人の親切を喜べないものでしょうか。

★

今まで家計を受持つていたお母さんが病氣になりました。

★

それを機会に主婦の座をお嫁さんにゆづりました。

お母さんの時には、息子の月給で親子夫婦孫の四人が充分暮せて、少々の預金もできました。ところがお嫁さんがやつてみると、たちまち赤字であります。お嫁さんはお母さんに言つても出してくれないし、仕方なしに自分の実家へ行つて五千元一万円と貰つて来ていましたが、あまり毎月のことです。で、実家の父も出してくれなくなりました。困つたお嫁さんはとうとう家出をしてしまいました。

お母さんに言わしますと、私がすれば少し残りますのに、嫁がやつてできない筈はありません。足りないのを出してあげることは知つていましたが、苦勞さすのも一つの経験だと思つてだまつていたのです。何故、私に家計のやり方を相談してくれなかつたのでしょうか。

お母さんには豊富な経験と知識があります。今のお嫁さんは、何故それを学ぼうとはしないのでしょうか。学校教育をうけただけでは世の中を渡れるものではありません。

★

★

息子のお友達がよく遊びに来ます。お母さんは大変行届いた人ですから充分すぎる程おもてなしをしてお客様には満足をして帰つていただきます。それは結構なのですが、お嫁さんはこう思うのです。

せめて主人のお友達が来た時には私がおもてなしをしてあげたい。しかしお母さんが良くして下さるので、自分の出る時がない。お母さんのお料理はおいしくて私にはとてもできません。お話もお母さんが上手です。でも、下手でもいいから主人のお友達には私もおもてなしがしたいのです。

これももったもな話です。この家庭はかつてはお母さんもお嫁さんも学校の先生であり、主人は現在もおつとめです。いわゆるインテリ家庭でありながら、他人から見れば三人共によくできた人でありながら、夫婦離婚という悲しい事になりました。どこかにやはりかけたものがありました。それは、この家に仏壇も神棚もなかったことです。いわゆる無信仰の家庭でありました。

★

以上あげました種々の例はすべて私の周囲の人々の中にあつた実話を御紹介したのであります。

★

信仰はまず、相手を批判する前に、自己を深く反省することを教えます。そして更に相手の立場に立って物事を考えることができるようになりますと、その家庭がそのままお浄土のような楽しいものになりまして、嫁と姑の問題など、何でもないことになるのではないのでしょうか。



—大正大学教授—

齊 藤 昭 俊

現代の思想は社会主義、実存主義、科学主義によって代表されているといえる。特に社会主義と科学主義の影響は大きい。

マルクス、エンゲルスの「共産党宣言」にすべてこれまでの社会の歴史は階級闘争の歴史であるとかかれている。そこでは階級闘争によって既存の全社会組織を力により転覆することでのみ成功するといっている。つまり、ここでは争いを基盤としている。いい合いをし、相手を屈服させ、力をもっておさえて成功する。現代はこの影響が非常に強く自分の見解や意図をかくすことは共産主義者の恥といわれるが、お互いに、いい合い、止揚しようという形式になっている。力によって屈服したり、いいまかされたりして、果してそこに平安

があるであらうか。

科学主義の中でも実証されないもの、不合理なものは認めない風潮を助長した。人間生活の中には合理的で実証されるものばかりはない。心情的なものや、精神的なものはいわば不合理なものである。すべてを分析し対立化し、合理化しようとした動きの影響が現代に大きな後遺症をのこしている。それは精神的健全性である。

仏教では争いのもとをなくし、自己を反省し、相手をよく理解することによって解決しようとする総合的方式をとる。法然上人の七箇条制戒に、別の考えをもった人といひ合いをしてはならないといましめている。そこでいい争いをしても何もならないといましめている。そこで益々違った争いの種をつくることになる。それよりは、相手の違う意見をよく観察し、己れの立場を考えて行動した方がよいと教えているのである。また、同じところに、自分勝手なことをいって、いい合いをして、利口な人から笑われ、馬鹿な人をまどわすようなことはしてはいけないといっている。自分の考えだけをのべたところで必ずそこには足りないところがあるし、そんなことでいい争いをしてもいいことはない。人をまどわすことだけだといっている。

道元禪師は坐禪并道の仕方をのべている并道法という書物

の中で、粗略であってはならない、無礼なことをしてはいけない、人を馬鹿にするようなことをしてはいけない、といっている。これは争いのもとを全くなくすことで、争いのもとをすべておさえている。対大己法という書物では、謙卑の心をもてといっている。常にへり下った行為、気持をもてば、そこには争いは生じない。

親鸞上人は越後浄興寺廿一条禁制の中で、無智の身をもつて諍論を好むことを禁じている。何も分らないものが、いい合いをする必要はない。人間なんてものは全く愚かなものなのだ。その愚かで、何も分らぬものが、何んていい合いなんかする必要があるかというのである。また、有名な歎異鈔では、私の弟子、あなたの弟子というと、そこにいさかいがでる。私には弟子は一人もいない。ともに、一緒に道を求める同行者なのだといっている。全くすばらしい言葉である。

伝教大師の根本大師臨終遺告の中に、おこったり、なぐったりしてはならないといましめている。これは僧侶の共同生活をいましめたものであるが、延暦寺禁式第二十二条の中にも、闘争、罵詈はいけないとしている。また恵心僧都四十一箇条の誠の中には瞋恚を起してはならない、他人の好悪をいってはならない、妄語はいけない、人を恨んではならない、追従してはいけない、人を疑ってはいけない、誹謗してはい

けない、無礼放言は氣にとめてはいけない、人を打ってはいけない、讒言、中言を信じてはいけない、他人の物を借用してはいけない、多言戯笑はいけない、口論をしてはいけない、問答論議を好んではいけない、というようなことが書かれている。そこには争いのない世界が想定されている。争いのない平和な世界は仏教ではやはり基本は、個々人の心のおき方にあることを指摘している。個人が争いのないことを望むならそういう世界があることを教えている。

現代世界では、家、社会、国家の内外に争いがみちている。新興宗教は戦後の欠陥、病、貧、争いに目をつけて信者を伸ばした。病と争とは仲々解決できない。家の中では嫁と姑、社会にあつては労働組合、学生運動、住民運動、消費者運動と、対立は激化、論争は益々盛んである。国家間での最たるものは戦争である。争いは無言の争いから、口論、喧嘩、闘争、革命、戦争と数限りない形式で行われている。仏教は争いの原因となるもの貪・瞋・癡による心作用に求め、その解決をはかった。

社会主義、科学主義がとうとうと流れ、すべてをおし包んでいる。私達は仏教の教えている心による、総合性による解決を忘れてはいないか。世の中は、世界は必ずしも、正、反、合の対立によるのではない。

ヨーロッパ人は自分達の行きづまりを感じて、東洋的なもの、仏教的なものに目を向け、仏教に対してヨーロッパ人は直接に接しようとしている。宇宙の総体は色心で表わされているが、色は単なる物質的存在ではないし、心は単に精神的存在ではない。色心はそのまま如来の理智であると考えられている。色心が異つていても、もとは一つであった。本来不二であった。だから、対立のままが統合で、統合のままが対立であるというのが仏教の考え方になる。西田哲学では絶対矛盾的自己同一といった。ここにはあるべきものとしては、争いのない平和の世界があるが、あるものとしては争いの世界がある。そこで、あるべきものを知ることが必要である。あるべきものを知ることが無明の世界から、明の世界にいくことである。つまり、仏の教えに目覚めることが、争いの世界から争いのない世界に入ることになると考えられる。

俗世間、つまり争いの世界から、聖なる世界、つまり争いのない仏の世界に、私達は生きることが出来る。私達は俗の、争いの世界に生きながら、聖の、仏教の、争いのない世界に生きることが出来る。それは、仏教を信じ、仏教を知り、仏教を行ずることによってできると説く。たとえば、念仏を行ずることによってそれが出来る。現代最も必要なものは仏教的な行や信であるといえる。人間の頹廢の一つは、争

いの世界の讚美であるといえる。仏教は争いを讚美しないし、争いのもとをなくそうとする。そこに仏教行者の争いのない世界がある。争いを讚美し、争いをかりたて、争いのために怒りをかき立てて、相手を威圧し、やつつけ、自己の利益を得る争いの世界は、限りのない矛盾を生み、限らない争いを継続していく。そこには永遠に平和がない。私達は現代の争いによって組み立てられている社会を仏教的に見直すことによって、あるべき社会を知ることができるであらう。

善惡の相克

成田 俊治

(仏教大学教授)

現代の科学技術の急速な進歩と、物量の豊富さにより、私達は高度なそして物質的に豊かな文化生活を享受している。それをもって幸福感に浸り、そこに人間生活の価値を見出しているのが現実である。しかし、人物は榮え、心は枯れる。

といわれる如く、一方ではそれがより根本的な生活意欲を麻痺させ、人間疎外、自己喪失をもたらし、精神的荒廃を深めていることも事実である。人間の際限のない物質的欲望、そして征服欲、権力欲、その獲得への道程は、冷酷なまでに他を傷つけ倒してまで得ようとする修羅の世界にも等しい。世界的には国家間・民族間の対立。また国家権力・社会秩序に挑戦しようとする体制運動、平和を口にしつつ自己自派の誇張・拡張だけの権力闘争。そしてまた現象的な平和を破壊するが如き争いに対しては、万人すべてこれを否定し、平和の回復・人類の幸福を叫ぶが、自己自身にかかわる問題となれば感情をむき出しにしてまで争う人びと。また隣人に負けまいとする虚栄心、他人の子に負けさせたくない親の競争心、更には家庭における親と子の断絶。

このように私達のまわりには争いの渦が幾重にもまき、人生これ妥協と闘争といわれるのも半ば理があり、仏教という闘争の世界とでもいえよう。このような闘争の束縛に気づき、争いのみにくさ、恐ろしさに果してどれほどの人が気づいているであろうか。たしかに現実社会の目に見える争いについては、反対もし批判もし、時には反省もするであろうが、しかし、自己の内に目をむけ、争いの根元である自己の心の内なる争いに気づく人はごく稀ではないだろうか。自己

の心の内での争いとは、すなわち心の葛藤であり、心の善悪の相克なのである。

○ ○ ○

さて、私達は心の中に相対的な善と悪とを同時に持っているものである。善を考えると同時に悪も考え、善をなしつつ悪をなすという「善悪不二」が人間存在の本来のあり方なのである。ある行為を善と考え実行しようとすると同時に、一方ではその行為によってもたらす利害得失を考えて、その行為を中止してはどうかという悪の誘惑が心の中に起る。逆に物を盗み、人を中傷誹謗して不利をもたらすなど邪悪な心が起る時には、そのような行為はいけないという善の心が起るのである。また悪の誘惑に負け邪悪な行為をおこなえば、決して平気ではおられず、所謂良心の呵責を感じるのである。

このように善と悪とが一つになって葛藤・相克をつづけていくのが、人間のありのままの姿であるといえよう。と同時に、この善と悪とについて、悪は否定さるべきものであり、善は肯定さるべきもので、悪をすて善に進まねばならない、とする考え方もまた人間のあり方を示すものであろう。善悪をわけて善をすすめ心の中の悪を克服しようとするのが聖道門の立場とするならば、善悪不二で悪から離れられない自己をみつめていくのが浄土門の立場であるといえる。

「人はあるべきやうわと云七文字を持つべき也、僧は僧の有るべき様、俗は俗の有るべき様也。……此あるべき様をそむく故に一切あしき也」とは、平安末から鎌倉初期にかけての動乱の世に生き、戒律復興による旧仏教の復興をさげんだ梶尾の明慧上人高弁の言葉であるが、これは前者の立場を端的にいいあらわしたものである。彼は動乱の世をあしき世（悪）Ⅱ末法とし、その末法という歴史的現実を客観的に把握し、あしき世となった原因を、あしき世の構成員たる人間個人のあり方に求め、正しい社会、幸福な社会にするために人間一人一人が「あるべきやう」でなければならぬことを説いたのである。この「あるべきやう」は、老若男女、職業身分などを問わず、すべての人々に適用される生活規範である。特に彼のいう「あるべきやう」は個々の人々のあるべき姿はもちろんのこと、人間としての「あるべきやう」を求めたのである。それは「ただ心のじつぽうに実あるふるまいは、おのづから戒法に付合すべき也」と、心の実あるまこと（善）が根元であり、まことあることにより仏教的道徳行為となるという。そして常に「人は常に淨頗離の鏡に日夜の振舞のうつることを思うべし。是は陰れたる所なれば、是は心中に竊に思へば人知じと思ふべからず、曇り陰れなく彼の鏡にうつる耻かましき事なり」と日々の反省を求め、さらに「心身正

しくして有べき様にたに振舞は、一切の諸天善神も是を護り給へり。願も自ら叶ひ、望もたやすく遂るなり」といい、心の内の惡を克服し、人として実践すべき道を説き示しているのである。

○ ○ ○

ところが、このような心の中の惡をしりぞけ、善を生かしていくことが、果して我々に実践できるかどうか。もちろん、実践しなければならぬ、努力しなければならぬ、ということとは常に意識していることであり、時には惡を打ち破ることもあろう。しかしたとえ惡を打ち破ったとしても一時的であり持続することはできない。また惡と知りつつ思惟し行為し、惡から離れようとしても離れられないその苦惱、そして遂に自己の能力ではどうすることもできないという自覺。この自覺こそ、善惡の対立を越えた超越的絶対者への帰依となるのである。

明慧上人と同時代に生きた宗祖法然上人は、明慧上人とは対照的に、末法を主觀的に把握し、末法を末法として肯定し、その中に生きる人間の本质を求め、現実には生きる自己の態度、方法を説いたのであるが、その根底は、自ら反省に反省を重ねたところに見出し得た赤裸々な人間性すなわち劣機の発見であり、凡夫の自覺であつた。上人は自ら「愚痴の法

然房」「十惡の法然房」といわれ、「煩惱具足せる罪惡生死の凡夫」といわれたが、それは現実には犯した罪とともに、無始よりこのかた生死流轉し罪を重ねている凡夫であり、これが現実の人間であるとされたのである。自己が罪惡生死の凡夫であり、救われ難い存在であるという自覺に立つてこそ、善惡に対して如何に無力であるかを知り得、ありのままの自分が許され救われる絶対者（仏）を見出し得るのである。

「心のみだるるは、これ凡夫のならひにてちからおよばぬ事にて候、ただ心をひとつにして、よく御念仏せさせたまはば、その罪を滅して往生させ給ふべきなり。その妄念よりもおもき罪も、念仏だにもし候へばうせ候なり」と上人は説かれてゐるが、これは心の中の善惡の心を自らの力ではどうすることもできない凡夫のために、念仏を申すことにより、仏の本願力によつて妄念も罪も自ら消え失せるという阿彌陀仏の慈悲を示されたものといえよう。

○ ○ ○

私達は、現在あまりにも外に目が向きすぎてはいまいか。他に対して煩惱のまま争ひの心をもやす前に、自らをふりかえり自分自身の本当の姿を知ることがまず必要ではないだろうか。自らを本當に知り、人間の弱さを本當に自覺した時、争ひは消え失せるであらう。



に	こ
聞	法
く	語

法然上人の人と生活(上)

女性たちへの態度

宝田正道

法然上人が私淑された唐の善導大師は、戒律にきびしく、特に女性に関しては「眼を挙げて女を視ず」という生活信条を守った人であった。「眼を挙げて」というのは、色目をつかうとか、巧言を弄するとか、いろいろ策を用いて、とにかく積極的に女に近づこうとすることを意味する語句だと思う。したがって大師は、生涯、長安を中心として尋常ならざる教化を人々の上に及ぼしながら、事女人に関しては個人的な交渉は一切なかったと見るのが至当であろう。初期の仏教教団が教示した「五障三従」「外面如菩薩内面如夜叉」の女性観を、そのまま忠実に遵守した一典型といってもよいかもしれない。

みずから「遍依善導」を称して教義の上では全面的に

この善導の導きに随順した法然上人は、日常生活の上でも、ある程度その影響を受けたであろうことは想像するに難くない。しかし、上人の時代はすでに末法濁世に入り、「せぬは仏、かくすは上人」という墮落的な僧界一般の風潮の中にあつた。上人は、みずからは「聖」の群れに投じて、切磋琢磨、よく清僧の境界を守り抜かれたが、多くの「上人」が、形は僧形でありながらかけでは本能的に生ずる色欲煩惱のとりことなつて女犯、姦淫の誘惑にひきずりこまれてゆかざるをえない現実の姿を、いやというほど見せつけられて心を痛められたに違いない。そして、理屈ではわかつていながら精神的肉体的にずるずると煩惱に落込んでゆく弱き凡夫の本性を見極め

られた末、とうとう、この弱き凡夫たちをこそ救つてやらねばならない、ということに気がつき、いわゆる「悪人正機」の念仏を主張されるようになったのである。だから、みずからは「聖」の生活を保ちながらも、あえて自分も戒定慧三学の器物にあらず、と宣言され、「弱さ」を共にする人間の一人として、他力本願念仏の一路に進進するとともにこれを強調せられたのである。まさに「人間の宗教」を樹立されたといわれるゆえんである。

したがって、周辺の女性に接する態度も、おのずから善導ほどきびしく女性忌避を云々されることはなかった。女性も同じ人間ではないか、というのが上人の立場である。すなわち生涯における女性関係も、すこぶる淡淡としたものであって、「女性関係」という現代的な語調の響きからさえ全く遠く距つた人間交渉の一環にすぎなかった。「私つくる人」「ほく食べる人」というコミーシャルに眼の色変えて男女差別を大騒ぎする今日的な色眼鏡など、爪の垢ほども感じられない、男女平等観に立ったものである、といったほうがわかりやすいかもしれない。

こういった見地に立って、上人と女性との関係を私は私なりにおよそ次の三つの場合に分けて考えてみよう。

第一は上人を生んだ母親の生涯、第二は教化の対象となつた有名無名の多くの女人との交流、第三は晩年に起つた「韋提希夫人」との邂逅についてである。

まず、上人の生母について、伝記はただ「秦氏」というだけであつて、多くを語らない。わかることは、「秦氏」といえば古い時代に日本に帰化した大陸系民族の子孫であろうということ、その弟に、後に上人（勢至丸）が出家の縁を受ける菩提寺の院主親覚がいたことぐらいである。勢至丸は、美作国久米の南条稻岡庄に、その郡の押領使であつた漆間時国の子として生れ、永治元（一一四一）年春、九歳の時、庄の預所明石定明の夜襲に遭つて両親とともに一家離散の運命を啓くと伝えられるのであるが、その際、父時国は深傷がもとで死亡し、相手の定明も勢至丸が物蔭から放つた小矢で眉間を打たれ逐電したことは伝記にも明らかでありながら、母の動向、その消息がどうであつたかは、さっぱり知ることができない。当時の武家制度ないし社会的慣習から考えて、多分夫とともに殺されたか、その跡を追つて自刃して果てたか、のどちらかであろう、と想像するのが常識であるが、別伝類によると、同じ年の冬、母に送られて叔父に当る前記親覚の門に入つたことになっている。『勅伝』

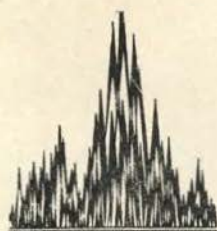
(卷二)などになると、恩愛の絆断ち難い、この母子訣別の有様を、いかにも史実らしく描写しているが、きびしい武家社会の中で、館の当主を失い、一粒種の息男を手放した若い未亡人が、敵方からそのまま家屋敷を与えられ、安泰に生き延びたとは到底考えられない。かりに生きるるとすれば、屈辱を忍んで敵の軍門に降り、妾奉公のような形で生ける屍となる以外に途はあるまい。「秦氏」がそこまで落ちてでも命を永らえたかどうか、大いに疑問の湧くところである。

ただ、『知恩伝』や『十巻伝』には、後年、東山大谷に住んだ法然上人が、近くに草庵をつくって母の所居とし、朝夕膳を備えて孝養を尽したと伝え、また、醍醐本の『法然上人伝記』だけは、父が非業の死をとげたのは上人登山(十五歳)の後のことであるとし、学者の中にはこの説を支持する人さえいる。すなわち、叔父の観(寛)覚が小児の直人でないことを見抜き、両親に勧めてこれを比叡山に送ることにしたところ、父時国は別れに際して「自分は敵をもつ身であるから、登山の後もし敵に討たれるようなことがあったら、どうか後世を助(たす)けてほしい」と頼んだという。そして、予言どおり兩三年ほど経ってから無頼の徒に殺されたので、上人は嘆き悲し

みのあまり世を捨てた隠遁者になる決意をされた、というのである。しかし、それにしても独り残された「秦氏」は、その後どうして暮したのか、皆目わからない。七、八十歳の老母になるまで上人がこれを放置しておかれたと考えるのも不自然であるし、母儀との往復書簡も真偽未詳の文書として残されている(『法然上人全集』付録)ものの、やはり不可解な謎といわざるを得ない。

ちなみに、美作誕生寺にある位牌には、久安三(一一四七)年十一月十二日、行年三十七歳で亡くなった母の法名として「解脱院殿空誓秦氏妙海大姉」という文字が刻んであり、百万遍知恩寺の什宝と伝えられるものは、上人が承安三(一一七三)年三月十五日という日付で両親の位牌を作り(父時国西光、母妙海)、肌身離さず大切に護持して念仏回向されたことをうかがわせるに足る文書がある。

察するところ、「秦氏」は上人の立教開宗を見ずして夭逝したか、さもなくば弟の手に引取られて命を永らえたか、そのいずれかであろうと考える以外に道がないが、思えば上人は、幼にして母と離別したからこそ宗教革命の偉人としてより広い孝養を尽せたともいえるのである。



次に、教化の対象としての女人との交流について、上人自身、道俗貴賤、老若男女の別を問わず、機会あるごとに多くの貴顕庶民と接して念仏を勧められたので、ここでは、たまたま伝記や消息類を通じて探り得る女性たちを挙げるにすぎないが、それでも上は宜秋門院（後鳥羽天皇中宮任子、九条兼実の女）や鎌倉の二位の禅尼（源頼朝後室政子、北条時政の女）から、下は室の泊の名もなき遊女に至るまで、各層にわたることがうかがえる。

上人は、九条兼実の支持を得たこともあるが、兼実が「近代の名僧等、一切戒律を知らず」（『玉葉』）と極言しているように、当時の僧界で戒律の道を学び、しかもその効験いちじるしと信ぜられる「名僧」はほとんどいなかった。

だったので、いきおい上人が選ばれて宮中や貴族の邸宅に出入りできたのである。したがって、それは「受戒」のための要請が主目的で、「持戒の行は、仏の本願にあらぬ行」（熊谷入道に与えた御返事）ときめつけていた上人にとっては、むしろ痛し痒しの

出向であつた。上人も、みずからいう甲斐なき辺国の士民で、殿上へまいるべき器量ではないが、「上より召せば、二度まいりたりき」（『西方指南抄』）と告白せられているとおり、本来は気が進まなかったにもかかわらず、お上の命令であるから仕方なく請に応じられ、また、専修念仏を勧めるよい機会にもなればと思われたからこそ、出向いて行かれたのだらうと思う。建久二（一一九二）年九月、宜秋門院の受戒もこういう意味で果されたのである。

鎌倉の二位の禅尼（二品比丘尼）に対しての接し方は、内容的に違ふ。これは明らかに相手から念仏の功德を尋ねられたことに對する返信ともいえるものである。しかし、受身である点は変わらない。「九条殿下の北政所へ進ずる御返事」という消息も残っているが、これも同様、書簡の往復による交流にすぎない。その他、尋常なる尼女房たち、尼聖如房、大胡太郎実秀の妻、法性寺信実の伯母なる女房、室の泊の遊女などに示す御詞が、いろいろ残されているが、いずれも相手の質問に對する答の形式が多く、こちらから積極的に、また、女性だからとてわざわざ美辭を連ねるなどという構え方をした文章は一つもない。遊女たちには、せいぜい別記のように論した

うえて、弥陀如来はそのような罪人のためにこそ弘誓を建てられたのだ、と説かれているにすぎない。女性を意識しての発言はほとんどののが特長である。もっぱら男性と同様の扱いをしてもらえるのである。男女平等観に立つ上人らしさがうかがえよう。

げにもさやうにて世を渡り給うらん罪障、まことにかるからざれば、酬報またはかりがたし。もしかからずして世を渡り給ひぬべきはかりごとあらば、すみやかにその業を捨て給ふべし。もし余のはかりごともなく、又身命をかへりみざるほどの道心、いまだおこりたまはずは、ただそのままにてもはら念仏すべし（『室の泊の遊女に示す御詞』——『勅伝』九）

ただ、女性からの具体的な日常生活上の疑問については、それなりにズバリと答えておられる。たとえば、『堂上方の女房たちより問いまいらすと見え』（『和語灯録日講私記』）る質疑応答を集めた「百四十五箇条問答」には、旧来の風俗習慣と念仏との関係に戸惑いする女性たちに対して親切に要領よく答える上人の姿勢が随所に見

られる。その若干の例を挙げてみよう。

経をば僧にうけ候べきか。答、われとよみつべくば僧にうけずとも。

妻、おとこに経ならふ事、いかが候べき。くるしからず。

尼になりて百日精進はよく候か。答、よし。月のはばかりの時、経よみ候はいかが。答、くるしみあるべしとも見えず候。

女のものねたむ事は、罪にて候か。答、世々に女となる果報にて、ことに心うき事なり。尼法師、かみをおほす、罪にて候か。答、三悪道の業にて候。

産の忌みいくかにて候ぞ。又忌みもいくかにて候ぞ。答、仏教には忌みといふ事候はず。

（「百四十五箇条問答」——『和語灯録』五）

さて、最後に晩年に起ったという「韋提希夫人」の訪問ということについて若干触れておきたい。法然上人は、建暦元（一一二一）年の冬、赦されて都に帰り、東山

大谷の禅房に入られたが、年が明けるとすぐ病床に臥されるようになった。その頃のある日、突然どこからともなく一人の貴婦人が車で居室を訪れ、たまたま常隨の弟子勢観房源智だけが障子の外で様子を聞いていると、その貴婦人は上人の病状を見舞って薬を進めるとともに、ご往生の後にはだれに法門のことなど伺うべきか、と訪ねたので、上人は



源空が所存は、選択集にのせ侍り。これにたがはず申さんものぞ、源空が義をつたへたるにて侍るべき。
〔勅伝〕四十五

云々と答えられたという。そして二言三言お物語りがあって、また車で帰って行く貴婦人の後姿を追って源智が外へ飛び出してみると、「北をさして行くが、かきけすやうに見えずなりにけり」という。不審を抱いた源智が「今の客人はどなたですか」と上人にうかがったとこ

ろ、上人は「あれこそ韋提希夫人よ。賀茂の辺におはしますなり」と仰せられた。そこでこの「韋提希夫人」とははたしてだれであつたか、ということが問題とされるようになったのである。いうまでもなく、韋提希とは釈尊在世当時マガダ国の王妃で、『観無量寿經』によると、彼女はわが子阿闍世のために頻婆沙羅王ともども幽閉され、殺されようとしたところを釈尊に救いを求め、その教えによる十六想観を修して無生法忍をうる事ができた悲劇のヒロインではあるが、菩薩の権化ではなく、実の凡夫である、とするのが善導によるわが浄土宗の解釈である。

故伊藤祐晃氏によれば、この貴夫人は当時加茂斎主だった禮子内親王ではないか、と想定される（『浄土宗史の研究』）。彼女は後鳥羽天皇の第二皇女で、元久元（一二〇四）年賀茂斎主となり、建暦二（一二二二）年に病を得てその職を罷め、承久二（一二三〇）年二十一歳で尼となった（法名真如性）。しかし、逆算をすると彼女が斎院を辞した建暦二年にはまだ十三歳にしかっていない。上人の病床を見舞いうる可能性はあっても、少し年齢が若すぎるくらいがある。そこで、三田全信氏は、これを修明門院重子に擬せられている（『浄土宗史の諸研究』）。重子は

後鳥羽上皇の後宮で、この頃三十歳余りの女盛りであった。また、反面にはこれを源智の母である平家公達（よしかど）の女房ではなからうかとする、突飛だが面白い文学的発想もある。しかし、いづれにせよ、上人がなぜわざわざ実名を秘して「韋提希夫人」と呼ばれたのか、その点に疑問と興味は残されている。思うに上人は、他でも高貴な婦人を「韋提希夫人」の別名で呼ばれている例があり、『九卷伝』巻四、正治二年四月羅生門の礎石発掘の記事中、観経ドラマのヒロインで、凡夫の代表として位置づけられる韋提希夫人のことは、常に上人の脳裡に強く刻みつけられていたところから、こういう呼び名を使われたのかも知れない。あるいはまた、さらに極端な推理としては、これは源智の見た一種の幽霊的奇瑞で、彼の錯覚と上人の病気が重なって起きた現象のようにもとれる。同じく賀茂斎主として平治元（一一五九）年から嘉応元（一一六九）年まで在職をした、後白河法皇の皇女式子内親王が、正治三（一一〇二）年正月二十五日に薨じているが、この女性はお家として「承如法」と号し、『勅伝』巻十九所載の「尼聖如房」と同一人物に擬せられているから、十一年前に亡くなった彼女のことをふと思ひ出された上人が、病の篤さにうとうと夢幻のごとく頭に泛べて「韋提希

夫人」とつぶやかれたのを、源智が耳にしたのかもしれない。上人は、生前尼聖如房（正如房）の臨終に長文の消息をつかわされている（『和語灯録』巻四）から、旧知の間柄であったことはいうまでもない。

以上、法然上人が教化の対象とせられた女性たちへの態度を、かりに三つに大別して述べてみたが、消息・問答・対話その他を通じて、おおむねいえることは、上人が常に「女」ということを意識せず、始終受身の、しかも淡泊な気持で、全く男性に対すると同様、教義を中心としてもっぱら念仏往生の道を説かれたものばかりで、その態度には相手を卑下したりする点は微塵もなく、また、お世辞もおだても感情の乱れもない。男女平等を文字どおり貫き通されているのである。あらためて感銘を受けるところである。生みの母親に対してさえ、「棄恩入無為、真実報恩謝」の信念を堅持されたことを思うと、ますます感動に耐えない。性的な偏執のつけこむ隙もない念仏の功德もさりながら、やはり上人の何人にもこだわらない教化力のしからしめるところであろうと思う。まさに「人間」救済の宗教者といわれるゆえんである。



ハワイに生きる 〆中〆

— 日系人社会史 —

新 保 義 道

五 呼寄移民時代（定住時代）

米大陸に於ける排日運動その他の理由により、一九〇八年（明治四一年）日米両国政府間の「紳士協約」により、在留日本人労働者の近親者と写真結婚者のみが呼び寄せられることとなり、ここに新規移民はそのあとを絶つに至った。

こうなると思惑通りに金が貯らなくとも軽々と日本へ帰るわけにいかず、ここにいいよ長期定住時代に入り、新たに日本から妻を迎える者が多くなり、写真を取

り交わして話がまとまれば日本で入籍させ、三ヶ月後にハワイに呼び寄せる所謂写真結婚花嫁が一九〇八年から一九二四年まで大挙して海を渡ったのである。併し日本で入籍しただけでは合法的結婚と認められないと、移民局内で牧師が司式して集団結婚式を行った。この移民局内での挙式を「波止場結婚」と呼んでいた。之は非人道的であり、個人の信教の自由を奪うものだという反対運動が起り、一九一二年以後は各自の欲するハワイ公認の牧師、開教使、神官又は判事の司式によって結婚し、司式者からその証明書を移民局へ提出することに改められた。

花嫁を迎えて和やかな新家庭が増加し、荒んだ気風も静まり、個人生活も社会も何となくうるおい一時的定住の気分から永住へと進んで来たが、外的には人権無視、差別、虐待に更に排日に加わって来たのである。

前時代からこの時代にかけて日本人社会に二つの底流があったが、これが排日に伴う日本語学校撲滅運動が白人の手によつて起されて表面に出て来た。

Aに属するのは大多数の日本人で、自分達の文化に加えられた攻撃に対し敢然と闘った。そして最後には裁判にまで持ちこんで勝利を収めた。

Bに属するのは一世の新興中産階級に属しアメリカ人に叩頭する人達、一九〇〇年代初めに教育を受けた自己栄達主義の二世及び利権を求める一部の日本人—キリスト教関係者にこのグループに属する人が多かった—で、政府のいう通りにせよ、アメリカ人側に妥協してこそ在留同胞の生きる道があるのだと主張し、更に新アメリカ運動と称し、

- 1 日本人二世は肉体労働者に止まるよう。
- 2 二世は高等教育の希望を持たぬよう。
- 3 ホワイト・カラーの仕事は、もっと適格な有資格

者（白人）にまかせるよう。

との運動を起し、マキキ聖域教会の奥村多喜衛牧師は帰農をすすめる学生会議まで開いている。これは当時高校を卒業する日系二世の半数以上が商業専門職業を選んだ為、全耕地を代表する耕主組合が帰農運動をおこしたのに呼応したものである。

この時代には仏教に対しても攻撃が加えられているのでその一部を挙げると

1 一九〇六年（明治三九年）本願寺が宗教法人の組織申請をしたが、当時の知事ジョージ・R・カーターは「仏教はハワイ島の将来にとって相容れない」と拒絶され、翌年ウォルター・F・フレア知事になって許可された。

2 一九二〇年（大正九年）ハワイ伝道会社日本人部は七月十日の会合で、耕主組合が仏教寺院と付属日本語学校に援助するのは不当だと決議し、仏教は日本人のキリスト教化を妨げ、二世にも日本の天皇へ忠誠を尽せと教える等の理由を挙げた。

3 前述の奥村牧師は、二世に仏教を布教するのはアメリカ人との同化を阻害するもので、仏教はアメリカにとって異端の宗教だと言っている。

六 移民禁止時代（永住土着時代）

一九二四年（大正一三年）七月一日排日移民法が実施され、帰化権を持たない日本人のアメリカ入国が厳禁された。当時極く少数の者はハワイの将来に見切りをつけて日本へ引揚げたが、大部分の者は差別待遇の屈辱の中から之を一大転機として却ってハワイに骨を埋める決心をかためた。そして生業に励み、自営業の分野にも進出、不動産への投資もはじめ、経済力、社会的地位、生活水準もよくなり、特に二世の教育には力を尽した。

併し、ここに至るまでには半世紀に近い忍苦の歴史があった。即ち移民当初よりの日本政府の短期帰国方針により出稼ぎ根性となり永住の決心を遅らせ、同化不能の人種と見なされてきたが、結局は、徐々にではあるが障碍を乗り越えてハワイに定着し、身辺の事情と環境の支配に順応して永住土着の時期に到達したのである。

この時期に至つても依然として人種差別に基く種々の問題があったが、その中でも日系市民（米国籍を持つ日系二・三世）の忠誠問題がハワイの立州問題にからんで

取り挙げられて来た。之も元をたたせば白人第一主義の人種差別から起つてきたものである。徐々に力を持ちかけてきた日系二世の進出を全体的に圧えつけ、経済と政治の世界で弱い存在にしまおうということを理論づける為に、「二世は一つは自分の生れた国、米国に、もう一つは両親の祖国日本にと、二重の忠誠心を持つてゐるから信頼できないものだ」という全米的態度を作り上げるためのものであった。従つて、当時の二世は同じ米国民民でありながら次のような差別を受けたのである。

A 仕事口の差別待遇

- 1 政府とか真珠湾軍港の仕事は貰え難い。
- 2 個人企業でも、将来の昇進が約束されるようなオフィスの仕事には採用されない。
- 3 公益事業会社では二世は除外された。
- 4 教師採用の条件として日本国籍（法律で認められている二重国籍）を放棄することを強いられた。
- 5 耕地ではルナ（監督）に嫌われて仕事を失つた者は他の耕地でも働けない。
- 6 地元の白人商社では日系二世の大学卒業者を採用

7

せず、トツプ経営陣には必ず白人を入れた。
神様はハオレ（白人）を熱帯地の肉体労働に適するようにお造りにならなかった。キビ烟の仕事は白人向きではないというような発言が堂々となされた。

B 不公平な賃金

一九〇一年

耕地のカジ屋日給

大工日給

英国人

四、一六弗

二、九〇弗

ハワイ人

二、九四〃

一、七三〃

ポルトガル人

二、三七〃

一、五四〃

日本人

一、五〇〃

一、〇九〃

一九〇九年頃一ヶ月二十六日就働

ポルトガル

一、二二ドル

一戸建住宅

ポトリカン

一、二二ドル

日本人

一八ドル

豚小屋式長屋

C 不公平な教育

白人の子弟のみの英語標準学校が一九二四年ホノ

D 白人居住地区からの日本人閉め出し

ルルに作られ、その後各島にも建てられた。

（尚一系は土地の所有を禁じられていた）

これが一九四一年（昭和一六年）太平洋戦争開始と同時に、ハワイの一世、二世の指導者は抑留（米大陸送り七〇二名）〔内女八名〕オアフ島ホノウリウリ抑留者三〇〇名以上）され、米国市民権を持つ日系二世ですら（日系政治家は辞任することによって誠意と愛国心を示せと迫まれ唯一名を除いて他は辞任し）スコフィールド兵營の二世兵は武器を取りあげられ丸腰の労働部隊に落され（戦争中にハワイの二、三世だけで編成された百大隊、米布混成の四四二部隊が赫々たる武勲を立てハワイの戦死者八〇六名中六二、七八%の五〇六名の戦死者を出し、勲功章も米国陸軍史上新記録し勲彰部隊と称讃されても尚且つ

「イタリアの戦線で闘ったとて忠誠心の証拠にはならない。太平洋戦線でジャップと闘つてこそ……」

「戦闘は日系兵のみがやつていうようで誤解される」というようなことが新聞紙上に発表されたのである。

四季の書



円応国師寂室元光

△世俗化に抵抗した気骨の書▽

林 錦洞

(書道家)

江戸末期の名勝詩選に横関天籟が永源寺看楓と題した詩がある。

「断崖勢い崩れんと欲す・深澗拭うよりも淨し・明水
全山を涵す・上下錦一色・千仞の巖根筆を援けて題
す・天下の奇観北の溪を推す。」

臨済永源寺派大本山である北の寺は、鈴鹿山脈の麓、
滋賀八日市駅から東三里程のところである。この詩にも
あるように昔から紅葉の名所として知られている。花の
生涯井伊大老彦根城主の廟所があり、音無川の清流と断
崖の越溪にあって、寺は鼻象山を背負って、静かにどっ

しりと六百年の法灯を伝持している。

秋酣となりこの聖域も今正に観楓と酒盃を傾けるに絶
好のシーズンであろう。だが、人は徒らに酔眼で景勝に
浮世の憂さを忘れるだけに止まり、開山円応国師元光の
秋霜苛烈な道念の生涯や、当時の禅林の世俗化墮落に対
し身を以て抵抗した、すさまじいばかりの氣迫を知って
いるのだろうか。

五山十刹と称され幕府や貴族の支持帰依の中で全盛を
誇った禅宗が、民衆との接触教線拡張を使命とすること
は当然だが、他面世俗化が墮落となることも戒められな

ければならないことであつた。寂室元光が師事した約翁徳儉は、執権時頼に請はれて来朝した建長寺道隆の法弟として道望厚く、建仁南禅の官利を歴任しているし、また一山一寧にも参禅してゐるから、こうした状勢下で元光が官利に迎えられることは容易であつたに違いない。事實、後光厳帝より天竜寺に迎えるとの勅旨を拒んでゐる。元光は禅の純粹さ清潔感というものを潔癖なまでに守り通そうとしてゐる。世俗への墮落、濁り、権力から隔絶しようとした精神は、先号の浄土僧徳門普寂も全く同じであるし、良寛や一休にも通ずるものではなからうか。この事は唯單純に所謂世捨て人という隠世、消極的な生涯ではなく、寧ろ當時の世相権力宗団に対する勇氣ある無言の抵抗であり警鐘であつたと思うのである。その激しい道念が極めて積極的果敢な生涯を全うさせたのだと言ふべきであらう。

元光は超邁特偉の資性を内包しながらも人と争ふこともしなかつたと言はれ、一見温順な中に『確乎』として応世の志なく、勢力を視るや腐芥よりも賤しく、王侯を待つこと浮塵よりも輕し』と言はれ、その強靱な道念は高

潔峻烈であつた。遺誠に

「切に遺骸を留めて以て人に之を見せしむべからず。土を掩い石を疊み、既に畢らば同志を勤めて只だ首楞嚴神咒を誦すること一遍せんのみ」

とあるように棺を埋めたら石を置けば足りる、墓や塔は不用と言ふのだらう。緋衣錦欄や宝塔に贅を尽すなど願みて襟を正さねばならぬことだ。

元光は美作高田、今の岡山津山に藤原小野宮実頼の子孫として、正応三年（一二九〇）出生した。十三歳出家十六歳仏灯国師維翁徳儉に師事元光を称した。三十歳入元して中峰明本の門を叩き寂室の号を附与された。元光の思想と生涯を決定づけたのはこの中峰明本によるところが大きいと言ふ。六年間の入元中、元叟古林清拙無見などの名僧を歴禅して、嘉暦元年（一二三六）帰朝した。権勢に媚びず招請を拒み、二五年余定住することなく、

五十歳を過ぎて漸く往生院に飯錫した。そして江州大守佐々木雪江の寄進によって音無川の清流と断崖を望むこの聖地に永源寺を建立したのである。禅師を慕つて門を叩いたもの二千を数えた。貞治六年九月一日（一三六

七) 七十八歳を以て入寂した。

元光が入元して参禅した中峰明本は元代著名書家趙子昂と親交がありまた、その書も学んだ人である。鎌倉南北朝にかけての宋、元の禅僧の来朝や邦僧の入宋入元は盛んで、当然ながら書、墨蹟においても黄庭堅、張即之、蘇東坡、また趙子昂、鮮于樞など本格派の書を学んだ禅僧の書が請求されていた。中峰明本は子昂の書を学び、更に独自に「さががき」と呼ばれるように、水墨画の竹の葉の画法に似た運筆で、リズムカルで張りがあり勁秀な書を書いてゐる。元光は入元して明本に参禅しながら書法も学んだことと思はれる。

遺誡二十行の行草書は九月一日臨終を前に門弟に示し書かれたものであるが、呼吸の乱れさえも感じられない、整然たるもので、法風を誠めて仏道勤精進を力説した、道念の堅固、師弟愛を物語っている。臨終刹那の遺偈は

「屋後の青山、檻前の流水、鶴林の双趺、能耳の隻履、又是れ空華に空子を結ぶ」

鼻象山を背にし音無川に臨む永源寺は元光が行雲流水

の果てに漸く選んだ聖地であった。だがその永源寺さえも丁度釈迦や達磨の入滅に示した奇瑞と同じく、すべて空である。徹底した禅の真髓を示し、本源に立ち還れと教えている。

王侯権勢の支援外護を受けて、その威容を今に伝えるのとは対象的に、元光は時流を静観、権力を遠ざけ、本来の面目に徹した生涯を貫いた。遺偈は門弟二千人を擁した永源寺さえも「高野の父老に付与して、各自に散り去れ」と、微塵の執着も残していない。だが六百年後の今日、臨済の名利として巍々として輝く、現し世の名利何するものぞと諦観する元光の生涯こそ私は本物だと思ふし、敬仰してやまない先賢の一人である。

君知るや み山の奥の もみぢ葉の

人知れずとも 赤き心を

先賢の詠んだこの感懐は、永源寺にもそのままあてはまるようだ。人知れず紅葉しても、人は之を求めて自ら道を作る。

円応国師寂室元光の大喝が俗耳をつんざいて、雷声となつて聞えて来る。



釋教『續々法の衣』に就いて
歌集

一附・高島式部小傳一

△第五回▽

石 島 俊 徳

(大津市石山・淨光寺住職)

第五節

念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法を、能々学すとも、一文不知の愚どんの身になして、

続々法の衣

(高島刀美子詠)

二四五 ね 願へただ元の誓の法の御名
手に握りつつ心たしかに
二四六 む 結び来し縁あればや一声の
説かれし法を聞くぞ幸なる
二四七 ふ 節々のよきもあしきも呉竹の
此の世はかかるあらましぞかし

二四八 つ 遂に行く道とて遠き他所ならず
油断のひまも足許にみん
二四九 を 教へられ行く道ぞかし我ひとり
弥陀頼むまでは迷ふなりけり
二五〇 し 篠原や招き招きていつしかと
無常の風に枯れ果てぬらん
二五一 む 迎ひ待ちてみるみる今日も暮れて行く
明日白雲の行衛定めず
二五二 せ 瀬々越えて水上遠く到るらん
千鳥も浪の法を渡りて
二五三 む 鞭打ちて常に静まれ兎もすれば
心の駒の走り出でけり
二五四 ひ 人毎に此の世に残るものもなし

果なにつけて猶頼まるる

二五五 と こととはに絶えず称ふるお念仏の

つもるじびきの巖なるまで

二五六 は はらはらと法の花散る極楽の

台に行くは唯弥陀の願

二五七 た たまたまに人と生れて来し身をば

嬉しともせん過ぐ人もあり

二五八 と 鶏の音の曉毎に喜ばん

法の花咲く世に生れ来て

二五九 ひ 引く息の出づる間待たぬ命をも

知らず顔にも過しけるかな

二六〇 い いかばかり功積みても阿弥陀仏の

誠より出る声にしかずや

二六一 ち 契り置く事皆かはる世なれども

弥陀の誓ひは違はざりけり

二六二 た たち渡る雲のあなたに影すみて

塵もへだてぬ法の月かけ

二六三 い 今更に悔ひの八千たび早くより

願はで過ぎし身の愚さを

二六四 の 残りなく行く道なれば老わき

打延へ願へ法の友どち

二六五 は 蓮の花開くを観ても潔き

後の宿りぞ楽しかりける

二六六 ふ 富士よりも仰げば高き弥陀の影

頼めば爰を離れ給はず

二六七 を 小田巻の糸ひく賤も称ふれば

やがて仏の御手にかからん

二六八 よ 吉野山高雄の峯も皆法に

咲くも染るも露の恵みぞ

二六九 く 苦しみも憂きをも知らぬ国に行く

種蒔きて置け今の世の中

二七〇 よ 宵朝に称ふる御名の声の内に

我れ極楽の道ひらくらん

二七一 く 暗くして仏の御影知らぬ人

あはれ手をひく縁しをもがな

二七二 か 斯くばかり生きとし生けるものの上に

人と出でしも誰が恵みぞや

二七三 く 位山登り染めても苦しみは

同じ心の世の中ぞかし

二七四 す 須磨の浦明石の月も我が胸に

すませば澄める弥陀の光りに

二七五 と 兎に角に六ツのちまたに迷はるる

身を心せよ弥陀の一筋

二七六 も 最上川河瀬登せるいな船の

仏はいなと言はでうくらん

二七七 い いつでも頼めや闇の夜の海の

浮き木の亀も法にあふ世を

二七八 ち 千代よろづその鶴亀も頼まじな

限りなき法に契る此の身は

二七九 も 漏る人もなき法の門我れとわが

入り得ずよそこに心かよはす

二八〇 む 紫の雲の迎ひは誰が為めぞ

弥陀を頼みし真心の人

二八一 ふ 浮世の海のりに渡さん弥陀仏の

助くる甲斐はなもならずして

二八二 ち 散る時は仇に散り行く物ぞかし

はかなく花に心そまれば

二八三 の 野に晒らし後は屍と成れる身を

いつまで包む心なるらん

二八四 く 隅々に分け行く道のしるしあれど

唯ひとところ峯に照る影

二八五 と 説き置きし仏の法の山々を

聞き得ぬ人や耳なしの山

二八六 む 無垢と言ふ真白素人に成りはてて

幼な心にお念仏をせん

二八七 の 野に遊ぶ牛のうの文字知らぬ身も

其假たすく弥陀の本願

二八八 み 満ち干るは世の有様よ末終ひに

みのりの海に皆浮ぶなり

二八九 に 煮る如く焼かるる如く火の宿を

早くも出でよ心ばかりは

二九〇 な 嘆くとも返らぬ事を嘆くなよ

早く仏の誓ひ頼みて

二九一 し 白雲の果て知らぬ身をいつまでか

虚しき空に立ち迷ふらん

二九二 て 手の舞ひも足の踏みども忘るまで

よろこべ雲の聖衆音楽

附 式部の晩年

式部は、明治十三年の夏、自らの九十六賀を催すとて、円山の左阿弥にて盛大に行われたことは、高畠家に蔵する当時の記録『高畠志貴婦九十六賀筵に付諸雜記、引請世話方簿誌』（明治十三年四月十七日祝開）に明らかである。

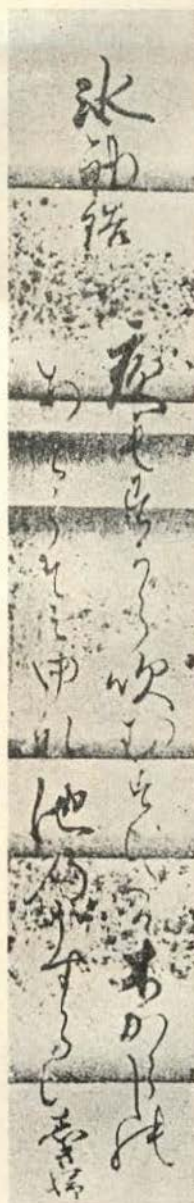
その九十六歳の歳晩、徒歩にて京都より伊勢に來り、九十

＜短冊二首＞

七歳の元旦、即ち明治十四年一月一日、二見浦の日の出を拝して、「五常楽」の一曲を吹奏し、内外両大神宮に参詣した。その時の感懷を詠じた歌が、京都に在住の燕安居小笹喜三翁が多年苦心蒐集され、先般思文閣より刊行された『平安人物志 短冊集影』に収録されているのを、この稿を執筆中に拝見しましたので、左に掲げます。

二見浦に出て朝日をおがみて
二見がたたてる巖を御杖にて
とよさかのぼる日のおほ御神

九十八姫志貴婦
(九十八とあるは、お正月の御祝儀年令か)。
式部は、この年の五月二八日に歿した。



氷初結

夜もすがら吹むすびたる木からしの
あとこそみゆれ池のうすら氷

志き婦



やよいの比
さか野を
行く道にて

花みむと朝たち行けば衣笠の
やましたかくれ雉子なくなり

九十七姫
志貴婦

『麦の舎追悼和歌集の端書』に、千畝は

「既に百たらず九のそち余りのよはひをぞ送られたりける。さるをいかなる風の誘ひたりけん。いにしとしの皐月、させる病などとしもなくて、黄なる泉のまろうどとなられにけり。」

と記し、『明治名家家集』の解題には、

明治十四年五月二十八日に歿す。享年九十七歳。京都東山長樂寺に葬りぬ。

とある。高畠家の墓域正面中央に清音。八十八（清音の娘、式部の八十八賀の年に生れたれば、この名ありと）の墓と並んで、式部の墓がある。

〔正面〕 高畠志貴婦之墓

〔右側〕

谷新樹 谷蔭に折残したるさわらびも
ともに青葉と成にける哉

九十七姫志貴婦

〔左側〕 明治十四癸巳年五月二八日

孝子 千畝建之

因に法名は正寿院隆譽妙音大師と称す。

明治十五年、式部の一周年忌には、和田登雄によつて、式部の木像一軀が造立され、明治十六年九月十六日には、千畝は聖護院に於て三回忌の盛大な追善法要並に雅会が催された。

その模様は、青木泉橋によつて絵巻物とされ、先づ開巻第一に、近衛家熙公の「含秀敷榮」の四大字に飾られ、第一席祭典場、奏楽席、第二席式部遺愛品陳列、第三席第四席は当日和歌吟詠席、第五席は俳諧席、第六席は書画揮毫席、第七席は簞釜席で、近藤芳介は「釜の湯のわきて昔を偲ぶかな木の芽たむくる今日のまどいに」と、詠じて居る等。

以上の七席、いづれにも式部の遺詠が飾られて居たという。以つてその一斑を知るべし。

明治十七年には、その日の詠を中心に『麦の舎追悼和歌集』が編まれた草稿が残っている。明治三十年、式部の十七回忌の記念に、千畝が出版した『かたみの蔵』一卷がある。

昭和五年刊行された『あを葉のかげ』は、山本香園が、式部の五十年忌を記念して、五月二八日に刊行した小冊子である。

昭和三十三年十月には、築瀬一雄編著

『高畠式部全歌集』（三百部限定、非売品）

昭和三十六年五月には、同氏の著

『高畠式部の研究』（碧沖洞叢書第七輯）

の御勞作がある。

本稿は、同氏の御承諾を得て、右二著の示教によつて、筆を運ばせて頂いた。附記して同氏の御厚情に對し拝謝申し上げます。

（つづく）

念佛ひじり三國志

(九)

―法然とめぐる人々―

寺内大吉

挿絵 松濤達文画



東山の中腹にそびえていた八坂の塔。

いまは跡方もない。つい先ごろの治承三年の四月、落雷で焼失したのである。

「この平安京では最古の塔だったのにのう」

と、俊乗房重源は残念がる。寺院の建造物には眼がない人である。

さらに住蓮は、この八坂の塔にまつわる歴史を重源の口から聞いた。

八坂とは、北は真葛カ原から南は清水坂に及ぶ地域をさしている。坂がやたらと多いので、この地名が由来した。

奈良朝の初期、朝鮮から渡来した人々が住みついた。彼らは織物を主体に殖産し、栄えた。八坂ノ造（みやっこ）と呼ばれた。大半が高句麗の出身である。氏寺（うじでら）として建てたのが法観寺で、五重塔は彼ら一族の繁栄を祈念したものだ。

ここできいさか渡来人の状況について触れておく。

日本では「渡来」と言い慣らしてきたが、朝鮮の史家によれば「亡命」である。

七世紀の半ばごろまで朝鮮半島では三国の併立が続いた。高句麗、百濟、新羅である。北中国の前秦と、高句麗、新羅を結ぶ北方プロットと、南中国の東晋と百濟、日本を結ぶ南方プロットが力の均衡を保ってきた。たしかにこの三国時代、主として百濟だが、やってくる朝鮮人は「渡来」だった。

ところが七世紀の声を聞くと、状況が変貌する。北中国の前秦が滅んだため、北方プロットは破綻し、半島の北半を領した高句麗は隋朝、続く唐朝との歴戦で疲弊しつくした。かつての同盟者だった新羅は、この高句麗を併告してしまった。さらに勢いがかつて百濟まで滅ぼしたのである。

新羅治下で生きられない高句麗、百濟の人々は大挙して日本列島へ亡命した。壬家の一族すらまじっていたと言われる。

彼らは簡単に日本人と融和し、この列島に根をおろした。しかもその持てる高度な文化は、日本の政治にも強く影響した。ほんらいが豪族群の連合国家だった日本の政権に、この集団帰化人は参画していった。

前号のあらすじ

明通律師の共をして光明山に俊乗房重源を訪れた住蓮房信国は、そこで、七重の高塔の建立に打ちこんでいる雄々らかな重源の姿に接した。まもなく住蓮は、許しを得て光明山の房中に住むことになったが、ある日彼は、師の重源が洞穴の奥で三条宮以仁王の遺髪の前で読経する声を聞くのであった。宇治川へ出陣した源三位頼政を動かした以仁王は、この光明山に逃げこんで重源にみとられて静かに三十年の生涯を閉じたのであった。

年が明けた治承五年（一一八一）二月、住蓮は重源にともなわれて京の街に出たが、大福長者五条大納言邦綱邸の門前ではじめて法然上人に会う。しかも聞けば、邦綱卿は突然の発病で死への道を急いでいるという。というのも、この二月四日には平相国清盛が熱病の果てにこの世を去っていたのである。

「奈良」という言葉自体が朝鮮語で「都」という意味だそうである。だから奈良王朝は朝鮮色の濃厚な政権だったとも言える。八坂の塔が天武期に建立されているのもこの事情と無縁ではないはずである。

豪族群の頂点に立ってきた天皇家、たまたま女帝紀に彼女を弄絡して王位をねらった怪僧弓削の道鏡を、この亡命族の出身だったと説く現代の朝鮮史家もいるほどだ。

となれば、和氣清磨が宇佐神宮で受けた神託は、そんな神事の形式をえらんだにせよ、民族の純潔を守ろうとするぎり

ぎりの斗いでもあったのか。

真偽はともかくとして、朝鮮帰化人の文化性、経済機能が高かったのはまぎれもない事実だろう。八坂一族をはじめ、大秦の秦氏などここ山城の地に強力な経済基盤が固められていたのである。

俊乗房重源が住蓮に八坂の塔の由来を語り聞かせている時点、周辺で生活する人々から異邦人のイメージは全くなかったはずである。八坂一族も秦氏も「完全なる日本人」となつて同化していたのである。

ちなみに法然上人の母親ですら、帰化人秦氏の出身であった。

八坂の法観寺から東へ数町登ると、深い山なみになる。清水寺の真北に位置する霊鷲山の山塊である。この霊鷲山は山容が、釈尊説法の地に似ていたので、同じ名を冠したと伝承される。

霊鷲山、略して霊山の麓には正法寺を中心にして、幾つかの別院堂宇が散在していた。その一つ、時雨沢の勢至菩薩堂に住蓮は住みつくようになった。

俊乗房重源のはからいによる。

光明山にいても修行にはならぬ。此処で念仏ひじりとなるがよい。

数日間、時雨沢に滞在した重源は、こう言い残して、いづこへかへ立ち去った。

すでに五条大納言邦綱の死がつたえられていた。重源としては光明山の七重塔を完成させるべく、新たなスポンサー探しに走らねばならなかったのであろう。

時雨沢の勢至堂には堂主がいた。若い天台僧である。

寂西と名乗るが、重源の念仏ひじりグループに属して、阿弥陀号をうけていた。心阿弥陀仏と号した。

心阿弥陀仏は毎朝、住蓮をともなつて京洛の街なかへ下つてゆく。四カ所ほどの念仏興行所があった。

念仏興行所――

無住の仏堂もあれば、在家の屋敷もあてられる。善男善女が集つていて、心阿弥陀仏から念仏の功德を聴き、大衆合唱するのである。梵唄のメロディにのせて南無阿弥陀仏をとなえる。

仏法と大衆との密会所でもある。

なぜそんな形で密会しなければならなかったのか。れっきとした比叡山の僧が、山を捨てて念仏ひじりなどという特種な姿を借りて、大衆に布教しなければならなかったのか。

律令がさだめた「僧尼令」によると、僧は寺院に籠居して国家の安泰を祈ることだけが使命であった。みだりに巷にあ

らわれて大衆と接触してはならないのである。説法も不可、まして大衆ともどもに念仏を唱えることなど、違法も甚だしかった。

こんな「僧尼令」があったればこそ、逆に念仏ひじりが巷にあふれたのが、この時代の実相であろう。

真贋入りみだれていた。

妖法を説いて民衆の財貨をかき集める贋物。

吉水の法然房を筆頭に真の救済を説くひじりたちもいた。

そして、違法だからと言ってこのひじりたちを取締る權威も機能も官憲は失っていたのである。

念仏ひじりの鼻祖は十世紀にあらわれた空也上人だと言われる。

天子の落胤説もあったほどで、空也は山に籠らず、いかなる寺院にも住することなく、巷を遊行して、念仏の功德を説いてまわった。

布教教化だけではなく、河川に橋をかけたり、井戸がなければ井戸を掘ったりした。彼に教化された念仏衆がその労働力を提供したのである。

「僧尼令」に叛逆し続けた空也だが、罰されたことは一度もない。天子落胤説が出たゆえんであろう。

空也上人の死後、しばらく途絶えていた念仏ひじりが、二

百年を経た今、真贋とりまぜて沛然と巷にあふれ出したのも乱世が深まったからであらう。それだけ救済を希求する民衆の声が強まったからであらう。

住蓮は、心阿弥陀仏を補佐して、この念仏興行に身を打ちこみはじめた。

さきに高倉帝の崩御に遇い、いままた平相国清盛が死んだ。平家は權威の象徴と実力者を月余の間に、ふたつながら失ったのである。近江で蠢動していた源行家らの叛徒は蹴散らしたものの、遠く鎌倉の源頼朝、越前にまで迫った木曾義仲、ぶ気味な運命が平家の頭上をおおいはじめている。

そんな状況で養和は暮れ、年号も寿永とあらたまった。

二一

四カ所ある念仏興行所。最も善男善女が集るところが錦小路の弁天堂であった。周囲には商家が立ち並んでいて、常連のほかにゆきずりの男女も弁天堂の念仏会に参加してくる。

数多くの人が集る理由が、もう一つあった。この念仏興行では、修法が終ると必ず一椀の芋粥が供されるのである。近隣の大商家が供養のためにと米や芋を興行ごとに寄進してくれたからである。

＜台 所＞



当時の洛中は、慢性的な飢餓状態にあつた。餓死者が続出している。反平氏勢力の蜂起で、各地からの輸送が途絶えたためである。

それでも富商は近在に米や野菜を入手するルートを握っていた。

念仏を唱えにゆきさえすれば、一碗の芋粥にありつける。満腹とまではゆかぬが、今宵がしのげるのである。興行ごとにおびたらしい数の男女が弁天堂へ集ってきた。

蓮池に臨む弁天堂の裏手は、夕暮れが迫ると活気にみちてくる。係りの女どもが大釜に薪をくべて芋粥を煮ている。椀にそれを盛りはじめ。

米の匂い、芋の香が、弁天堂の内部まで漂ってくる。

心阿弥陀仏や住蓮に指導され、メロディにのせて南無阿弥陀仏となえる信者の声は、この匂いを嗅いで、いちだんと高まるのである。

「ゆつくり、ゆつくり食えよ。舌を焼くぞ」

椀がくばられると、心阿弥陀仏はがつがつ食いはじめる信者たちに注意の声をかける。

「餓鬼道に堕ちた者はな、空腹の余り飛びついて咽喉を焼き、一粒の米も通らなんだ、という話もある」

説法することを心阿弥陀仏は忘れない。

ある日、彼は塩をひと袋、何処から仕入れてきた。椀がくばられると、箸を取ることを待たせて、一人一人の椀に少量づつの塩を投じていった。

「これは塩だ。からいはずだ。さあみんな食してみよ。この塩を混じただけで、芋の甘味がいちだんと高まるのよ」

そこで仏教説話のひとつくたまりを語りはじめる。

天竺で、たいへん貧乏な男がいた。あるとき主家の晩餐に招かれた。見たこともないような御馳走が山盛り並べられた。最初の皿から食べた。「うまいか」と主人は訊く。彼は首をかしげた。見た眼にはうまさうなのだが、味が一つ物足りない。「そうだろう」と言って主人は白い粉をふりかけてくれた。すばらしい美味に変じた。次の皿もそうだった。白い粉をふりかけぬと全く無味である。

腹一杯食いつくしたあと、主人は家で待つてゐる彼の女房子供にお土産をやるうと言つた。さっき食べたご馳走のどれを所望するかと聞いた。「あの白い粉を下さい。あれをふりかけると、何もかもが美味しくなります。きつとあれが一番うまいものにちがいない」と即座に答えた。「なるほど塩が最高の美味か」と主人は笑いながら、ひと袋の塩を彼に与えた。

わが家に戻った彼は「さあ、今夜は世界で最高にうまいも

のを食わせてやるぞ」と言いながらめいめいの皿に塩だけを盛ってやった。女房子供はがつがつ食いはじめ、たちまち苦がい顔になって吐き出した。こんなにもまずいものがあるかと罵った。

「塩だけを椀に一杯も食ってみよ。食いきれぬだけではなく、無理して詰めこめば人間は死んでしまうのだ。念仏は塩だ。お前らはふだんの成業に汗水を流さねばならない。そしてちよびり念仏の塩を、生活の中へふりかけるのだ。朝から晩まで念仏だけを唱えていたら、たちまち飢え死するからな」

巧みな説法に、住蓮は聞き惚れた。

ある夕暮れ、大釜の芋粥が煮上って、女どもが椀に盛り付けをはじめたときだ。蓮池を縫って小舟が一艘漕ぎ寄せてきた。三人の男が降り立った。太刀を抜きつれてゐる。

「さあ、その釜ごと寄越すんだ。この舟に乗せろ」

女どもを脅迫して、大釜を運ばせた。

盗賊である。

芋粥だけではない。運んだ女の一人が美貌なのを見てとつた盗賊は、

「さあ、お前も舟に乗れ。可愛がつてやる」

と白い手を掴んで引き寄せた。

堂裏のただならぬ気配を察して、住蓮はものかげから様子
をうかがっていた。もはや躊躇はならなかった。棍棒を握っ
て飛び出していった。

「待て。わしが相手になってやる」

「何を、この坊主奴が」

三人は太刀をふりかざして迫ってきた。

興福寺の大乗院で、武辺では聞こえた住蓮である。野盜の
三人ぐらい始末するのに手ひまはかからなかった。たちまち
棍棒で叩き伏せ、凶器を奪った。

乱闘を聞きつけて、弁天堂のなかから信者たちが池辺に集
つてきた。

「ぶっ殺せ」

「簀巻きにして、池のなかへほうりこんでしまえ」

興奮して口々にわめく。

それを制したのが心阿弥陀仏だった。

「皆の衆、何を言うか。殺せだの簀巻きにしろだのと。これ
らはたしかに心得違いの野盜じゃ。しかしもとをたせば、
わしらと同じ人間だ。彼らも飢えて、こんな所業に出たのだ
ろう。さあみんな一緒に芋粥を食べるのだ」

住蓮は押さえつけていた棍棒の力をゆるめねばならなかつ
た。

野盜は三人とも若かった。照れ臭さそうに善男善女の間に
坐りこんで、芋粥を食べはじめた。

「時雨沢へ連れて帰ろう」

と、興行が果てたとき、心阿弥陀仏は野盜どもの処置を決
めた。

「あの連中を、ですか」

「屋根がだいぶいたんでおる。奴らに修理させてやろう。仕
事を与えれば、人間誰でも正直になるもんじゃよ」

この人は、ほんものの宗教者だ、と住蓮は敬服して心阿弥
陀仏の横顔をあらためて見直した。

時雨沢の勢至堂へ住みついた三人の野盜のうち、二人はじ
きに何処かへ姿をくらましてしまった。盜賊の巢が恋しくな
ったのであろう。桶丸と呼ばれたアバタ面の若者は、これ以
後ずーっと住蓮の侍者として身辺から離れぬ運命となる。

三

念仏興行に出かけぬ日の心阿弥陀仏は、いつも勢至堂の奥
でうなり声を放っている。

病疾ではない。経巻をひらいて苦吟しているのだ。
部厚い経巻が彼の前にある。

六時礼讃だと説明した。

唐の善導大師が作したもので、一日を六時に分けて、諸仏諸菩薩の功德を頌詠している。

これの写本を、法然が五条大納言邦綱に依頼していたことは、前にも触れた。ところが後白河法皇の手もとへ届いたのである。

法皇の側近が、これの調声（メロディを付すること）を命ぜられた。心阿弥陀仏が比叡山にいたころ梵唄に長じているのを知る者が、調声を託したのである。

しかし遅々として進まぬ様子であった。

時雨沢はその名のとおり、時雨が多い。霊鷲山に降る雨が、この沢ではいちだんと濃密になる。

戸外の雨脚を眺めながら、心阿弥陀仏の苦吟を耳にすることは、耐えられぬいら立ちをおぼえることがしばしばあった。今日も雨が降りこめている。

後白河院からやってきた若い貴人が、かしこまって心阿弥陀の調声に耳を傾けている。これまでに出来上がった部分のおさらいだ。

若い貴人の名は親盛。のちに大和前司親盛入道——法名を見仏と呼ばれた人である。

「梵唄ではないけない」

と、心阿弥陀仏はうたい終えると、自分に言い聞かせるように呟く。やはりこれまでの調声に不満を感じているのだ。

「梵唄のままで、難解にすぎる」

と親盛も同調する。

梵唄は天台声明の基本である。多分に宗教儀式化された音律である。高低の落差が激しく、よほどの声量を持った者でないと、うたいこなせない。小ぶしにも多岐にわたる音質が要求される。

「何と言っても六時礼讃は誰にでもうたいこなせるものでなければならぬ」

「さよう、今様だ」

二人はうなづき合っている。

大衆の中へ溶けこんでゆく念仏。それを助音する六時礼讃もまた大衆のもでなければならなかった。深山に寂居して、仏像に献上する聖歌では大衆が取りつきにくいのである。

「琵琶などのせて調声してみたら」

と、親盛が提案した。

「琵琶か。それはいい思いつきだが、適当な琵琶師がいるかな」

住蓮が言葉をさしはさんだ。

「一人、います。盲人の琵琶法師が」

吉水の禪房で、法然の説法を聞きにいったとき、何度か顔を合せ、言葉もかわしたことがある盲人生仏のことを思いうかべたのだ。

「どこにいる」

「このすぐ近くです。清滝寺の観音堂に住しています」

「清滝寺なら、この上ではないか。あの伽羅観音堂にいるのか」

「呼んで参りましょうか」

住蓮は気軽に座を立った。

清滝寺とは引導寺の別名である。青竜寺とも書いた。

狐をひつかぶって住蓮は時雨沢を出た。幸わい雨脚は少し弱まっている。

こんな雨の日、盲人の他出はあり得なかった。

伽羅観音の前で琵琶を爪びいていた生仏は、住蓮の話の聞くと、すぐに立ち上がった。

「六時礼讃のことは、法然さまからもかねて聞いておりました。写本が手にはいたら、調声してみよ、とも言われました。すぐに参りましょう」

たいへんな意気込みである。

琵琶に湿気を与えぬように、木箱にこれをおさめ、厳重に布をつめて、二人は引導寺を出た。

雨は完全にあがり、靈鷲山の頂きのあたりに明るい空すら見えはじめていた。

生仏は盲人だから、写本に眼をさらすことは出来ない。心阿弥陀仏が読み上げる声に、じっと聞き入るばかりだ。

心阿弥陀仏も余計な先入観を与えぬため、自分が調声したので捨てて、六時礼讃を棒読みにしている。

哀愍覆護我

令法種增長

此世及後生

願仏常攝受

願共諸衆生

往生安樂國

くりかえし出てくる文句だ。

何度目かのときだ。盲人の手が動いた。撥を引き寄せ、琵琶をはじきはじめていた。

さらに再び「哀愍覆護我」と心阿弥陀仏が読み上げたと、琵琶ははっきりとしたメロディを奏でていた。

「それだ」

心阿弥陀仏が呼んだ。

「やわらかい。女人でもうたいあげることができる」

親盛も膝を乗り出していた。

女人でもうたいこなせる——

これは、だいじなことだった。従来の梵唄は女性を駭拒す

〈六時礼讃の音律〉



る。声量も音質も女性の咽喉では消化できないものだったのである。

舞い唄のようにやわらかく、それでいて宗教的な壮重さをそこなわず、嫺々と盲人生仏の琵琶は新しい音律を流露させるのであった。

この瞬間に、六時礼讃の基本メロディが出来上がったようなものだった。あとは細部にわたって同巧異曲してゆけばいいのである。

生仏が時雨沢へ通ってくる日が多くなった。洛中へ心阿弥陀仏が念仏興行に下ってゆく以外の日は、いつも勢至堂にいた。送り迎えは若者の桶丸が、生仏の手を引いた。

生仏はひところ六波羅の平家屋敷で暮した男だ。それ以前は後白河院の側近だった。ただし大和前司親盛とは、入れ違つて未知な間柄で、この時雨沢で初対面だった。だが共通の知人や話題が多かった。

六時礼讃の調声だけではなく、政治の話題が四人の間でかわされるようになった。

平家の没落は眼に見えている。東国の源家武士が攻めのぼつてくることだろう。

「木曾どのは、どんな人だろう」

心阿弥陀仏がうれい気にたずねる。鎌倉の頼朝は左馬頭義

朝の子である。素姓もはっきりとしており、十三歳の年まで京都で暮らしている。宮廷政治を、雰囲気だけは知っている。

「それがまるでわからない。帯刀先生義賢の息子、というだけで、院におかれても皆目見当がつかないようだ」

親盛は眉をひそめる。

心阿弥陀仏の不安は洛中の大衆のものであり、親盛の憂慮は後白河院をはじめとする廟堂の貴族たちのものだった。

「田舎武士の乱暴者でなければいいが」

こんな共通した恐怖がある。

「しかし三位中将は武勇のお方」

と、生仏が元気づけるように言う。重衡の勇気をたたえるのである。

「もはや平家の顔勢は一個人の武刃ではどうにもなるまい」

心阿弥陀仏は結論して、迫り来る新しい歴史の実体を見透そうとする。

そんな混沌の洛中で、ある日住蓮はばったり路上で明通と出会った。弁天堂の念仏興行からの戻り道であった。

寿永元年の夏も終わろうとする蒸し暑い午後だった。

住蓮は、この明通に俊乗房重源を紹介されて以来のことを物語った。

「それでいまは、靈鷲山に住んでいるのか」

「はい」

「念仏興行に精を出しているというのか」

「そのとおりでございます」

「それは良かった。これからの仏法はな、深山に寂居していただくは何も出来ない。僧は巷へ溶けこんでゆく時代だ。この乱世、ひじり（私僧）だけが民を救うことになる。それにしても重源どのは、相変らず忙しく飛びまわっているぞ」

「ああ、重源さまはいまどこで何をなさっているのですか」あれ以来、絶えた時雨沢に姿を現さない重源だった。

「醍醐あたりに住しているそうだ。しきりに諸家に入りしりて寄進を求めている」

「寄進……光明山のですか」

「いや、もっと大きな復興だ。東大寺の大仏復元だ」

関白九条兼実の日記「玉葉」もその間の消息を書きつづる。

東大寺奉加ノ聖人、洛中ノ諸家ヲ廻リ之ヲ……。法皇ヲ始メ奉リ、貴賤ヲ論ゼズ。女院御奉加銅十斤。此所或ハ錢一千貫文、モシクワ金六兩云々。

どこまで精力的なお聖人だろう、と住蓮はあきれてみたりした。

(つづく)

二 編集後記 二

○この季節になると沢もなく淋しくなる時がある。はらはらと風に舞う落葉に、ふと涙したり、深々と暮れゆく長い夜、星を見ながら、突然一人ぼっちにされたような気持におそわれる。感傷的だと言ってしまえばそれまでだが、このような気持になるのは、おそらく私一人ではあるまい。毎日毎日の決りきつた生活の中に、ふと我が身を振り返って見た時、「いつたい私は何をしているんだらう」と、思わず自問したくなる。確かに何もしくとも時は過ぎ、歳はとつていく。しかし、人間として生れてきた以上、やはり自分の力でできる何かをして、この空虚な心を満してみたい。

○ああ、ちっとも進歩していないじゃないか。何気なく開いてみた一年前の日記を見て、思わず呟いてしまった。人間、そう簡単に変わるものではない。すっかり慣れてしまった毎日の生活を、少しずつでも

変えていくのは、簡単なようで難しいことだ。強い意志と忍耐がいる。今月の特集は「争い」であるが、これも己れと己れの欲求との争いである。争う以上勝ちたいのは人の常であるが、勝ちにもいろいろある。相手に有無を言わせぬ程ねじ伏せてしまいか、また負けるが勝ちの譬えのように、愚かな争いごとには忍の一字で負けて勝つか。しかし、相手が己れの場合、その欲求を取り上げては少し可愛そうだ。そうかと言って負けるが勝ちのように、欲求のなされるままになっても困りものだ。巷には思わず手を出してみたくなるようなものがたくさんある。良いものもあれば悪いものもある。しかし、悪人になろうと思う人間はないはずだ。みな良い人間になろうと心しているはずである。

○さまざまな誘惑の多い今日この頃であるが、欲求・欲望に負けることなく、己れに勝つよう何ごとにもくじけず生きぬくよう努めたいものだ。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

料不要

浄土 十一月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和五十年十月二十五日

印刷

昭和五十年十一月一日

発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

伝宗の秘書再版なる

浄土伝燈輯要 全一卷 限定一千部出版

定価 7000円 (送料280円) A5判 1074ページ

法然上人の浄土開宗以来、幾多の高足碩学によって、その法統・教学は著しい発展をみている。本書はこれら研鑽の一大集成として明治初年に和綴じ三巻本として発刊されたものを、各方面の要望を担って、ここに復刻再版。伝燈諸列祖の著作を網羅した本書は、今後の浄土教学発展の礎となるものであり、浄土宗寺院必備・必読の書。

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 浄土宗務支所内

発行所
申込所

浄土宗出版事業協会

電話 (03) 436-3351~5番
振替 (東京) 6-62587番

浄土教化トラクト

昭和51年版 『浄土宝暦』

B6判 40ページ

定価 45円 200部以上 40円 (送料実費)

好評『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価180円 (〒70円)

(200部以上 単価160円 送料実費)

〒102 東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944番